

# 「モネの庭」

## — 日仏文化交流の橋渡し —

**はじめに** 印象派を代表するフランス人の画家クロード・モネ（1840～1926）は19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したが、今もなお絶大な好評を博している。その絵画に劣らず、世界的に高く評価されているのがモネの庭である。一方、現在は日本各地で「モネの庭」と言われるものが再現され、多くの観光客を集めている。日本では、モネの名声がいかに高いかをよく物語っている現象であると言えよう。

本稿では、モネの庭が作られた当初から現在に至るまでの約130年間の経緯を顧みたと、日本における様々な「モネの庭」の再現と比較し、庭園を通しての日仏文化交流について考察を深めることにした<sup>1)</sup>。

**フランスに現存するモネの庭** モネの庭は、パリから北西に約80km離れたウール県ジヴェルニー村に位置する。モネが1883年から晩年までの後半生を過ごした場所であり、また、画家の野外アトリエとして多くの絵画の画材になったことも有名である。

モネの逝去後に徐々に荒廃したが、1976年にクロード・モネ財団が創設され、4年かけて復旧工事をおこなった。旧宅は歴史的建造物に、庭園はフランスの名園として指定され、1980年6月より一般公開している。ノルマンディー地方において、世界遺産に登録されているモン・サン＝ミシエルの次に人気を集める観光スポットである。毎年春から秋までの半季しか公開されていないが、2010年に530,000人、2012年に580,000人、2014年に627,000人と足を運ぶ客数は増加する一方である。内訳は明確ではないが、クロード・モネ財団のホームページで選択できる言語は仏・英・日のみであることから、毎年多くの日本人が訪れていることと推測される。

**日仏文化交流の舞台** モネの庭は概ね、家屋の前庭と、国道を隔ててエプト川沿いに広がる池の庭との2区域に分けることができる。

前庭は家屋の南側に位置し、門から玄関まで一直線にのびる小道と、左右対称に配置される花壇の構成は、フランス式庭園の伝統を踏襲している。フランス語では「Clos normand（ノルマンディー地方の囲い）」と呼ばれ、日本語では一般的に「花の庭」と命名されている。

池の庭はフランス語でも、日本語でも同じように「Jardin d'eau」「水の庭」と呼ばれている。その作庭は「花の庭」より7年遅く、1893年にモネが自宅の南、エプト川沿いの土地を買ったことに始まり、1901年頃に竣工したと思われる。つまり、自宅前の「花の庭」は元からあった庭をモネが改造したのに対して、「水の庭」は一からモネが構想を練って、自分の理想にあわせて新造した庭である。

「水の庭」では、自然な曲線を描く池の中にスイレンを栽培し、周辺にヤナギ・サクラ・サツキなどを植え、また藤棚をかけた「日本の橋」という木製の反橋を架けるなど、日本庭園の意匠を取り入れたことはよく知られている。しかし、モネは肉眼で日本庭園を見たことがないので、その着想の源はあきらかではない。断言することは難しいが、モネが自ら蒐集した浮世絵と、1873年にウィーン万博で作られた日本庭園と、ピエール・ロティなどのフランス人による紀行文に影響された可能性が高いと考えられる。

モネは日本を訪問することはなかったが、モネの庭を訪れた日本人がいた。モネは早くから浮世絵に興味を示し、日本の美術工芸品に強く影響されたと同時に、日本人もモネの絵画に親近感を覚え、ジヴェルニーまで足を運び、買い求めた。もっとも有名なのは実業家・収集家の松方幸次郎（1866～1950）とその姪黒木タケコであるが、その他にも洋画家の児島虎次郎（1881～1929）や斎藤豊作（1880～1951）などもある。彼らが入手したモネの絵画は現在日本の美術館で展示され、多くの日本人を魅了し続けている。こうして、モネの庭は当初から日仏文化交流の舞台であったといえる。

**日本における「モネの庭」** ところが、今日ではフランスまで行かなくても「モネの庭」と言われるものを日本でみることもできる<sup>2)</sup>。本稿ではすべてを紹介することはできないが、表5に今回の調査で数えた12カ所をまとめた。

何よりもまず、その数と継続的な人気に驚くべきであろう。1990年代半ばから近年まで、日本各地で「モネの庭」が再現された。もはや一時的なブームを超えたと言えよう。旧宅と庭園を忠実に模倣している事例もあれば、形態にこだわらずに、イメージを醸し出すような事例もある。表現は多種多様であるが、多くの構成要素の

中でもスイレンが必要不可欠であることは注目に値する。スイレンだけで「モネの庭」が想起できるほど、日本人の共有意識に深く刻まれたイメージである。

**西武池袋本店の「睡蓮の庭」** 日本に再現された最新の「モネの庭」を簡単に紹介しよう。モネやその絵画とは特別に関係のある場所ではないが、2015年に西武池袋本店（9階）の屋上庭園「食と緑の空中庭園」という野外フードコートの一 corner に、モネの庭とその名作「睡蓮」をイメージに「睡蓮の庭」が作られた。

縮小された池の中にスイレンが浮かび、その上に緑色の反橋が架かる。藤棚は再現されていないが、フジが手すりに絡む。また、橋の両脇にバラのパーゴラがある。これは、モネの「花の庭」の構成要素（バラのパーゴラ）と「水の庭」の構成要素（池、反橋、フジ、スイレン）を融合させた試みとでもいえよう。2016年には「人々の癒しと寛ぎの緑地空間」として評価され、SEGES（社会・環境貢献緑地）の「都会のオアシス」に認定された。

**おわりに** 130年ほど前、モネがフランスの僻地で作った庭が時空を超えて、これほど日本人の共感をよび、日本で再現されるとは想像もつかなかったことであろう。フランスにおけるジャポニスムという「日本趣味」の影響を反映しながらも、現在はフランス文化の象徴として日本に導入されている。最初の目的ではなかったが、日仏文化交流の橋渡しとなった。

しかし、モネの名作「睡蓮」がなければ、ジヴェルニー



図42 東京都・西武池袋本店の屋上庭園「睡蓮の庭」

にあるモネの庭も復旧されることなく、日本でも再現されることはなかったに違いない。このような絵画と庭園との関係は今後の研究課題としたい。

(エマニュエル・マレス)

註

- 1) 本研究は、JSPS科研費JP26283021の研究の一環として2017年11月23日に開かれた研究会「観光資源としての庭園」における発表の内容を一部含む。詳細は、エマニュエル・マレス「画家クロード・モネの庭をめぐる考察 フランスの日本庭園／日本のフランス庭園」『観光資源としての庭園』(2) 2016年度「観光資源としての庭園」に関する報告書』2018を参照されたい。
- 2) 小坂智子「『モネの庭』を巡ってージヴェルニーから日本へー」『長崎国際大学論叢』6、17-24頁、2006。

表5 日本における「モネの庭」(2017年11月現在)

県名	場所・名称	施設	作庭年代・開園など
1 高知県	北川村「モネの庭」マルモッタン	公園	2000年
2 静岡県	浜名湖ガーデンパーク「モネの庭」	公園（テーマパーク）	2004年
3 栃木県	あしががフラワーパーク「モネの池」	公園（テーマパーク）	1997年
4 愛知県	豊橋総合動植物園 のんほいパーク「モネの池」	複合施設	1996年
5 京都府	ガーデンミュージアム比叡「花の庭」「睡蓮の庭」	文化施設美術館	2001年
6 岡山県	大原美術館	美術館	2000年
7 岡山県	倉敷アイビースクエア	複合観光施設	2000年以降
8 香川県	地中美術館「地中の庭」	登録博物館	2004年
9 京都府	アサヒビール大山崎山荘美術館	登録博物館	不明
10 鳥取県	鳥取環境大学「モネの庭」	大学（高等教育機関）	2003年
11 東京都	西武池袋本店「睡蓮の庭」	百貨店	2015年
12 岐阜県	「名もなき池」モネの池（通称）	観光スポット	不明